

畫本西遊全傳

四編

壹



八遠1  
2500  
40-31





癸酉年正月廿四日

岳亭又岳譚

四篇

畫本西遊記

寫飾戴斗魚

十冊



油漬

西遊記四編序油漬

四大奇書者小說之冠冕也水  
許西廂最善模寫人情西遊之  
一書雖事涉怪誕熟讀來亦深  
有味然世多有荔支龍眼連殼  
吞者予有見於此採先輩未譯  
者續試譯之如何原不覃象胥

門入遠特  
2500  
卷 40-31



之學加才短思不贍心有得筆  
 不能言教回譯來皆隔靴搔痒  
 不甚中竅會倦而自棄長擱麓  
 底書肆某夙知之竊挑出以附  
 歌劔嗚呼我猶未甘心看客可  
 不堪閱間挿繡像欲喜兒輩耳  
 天保六星秋八月浪華中島寓

居多聞亭中誌之

岳亭五岳  



此書百回百冊もあきざりてをく分解するところありき  
 せむしは四十巻をのこし余りもその故ゆゑなる事をもいふ  
 やし書まじしをのりしに要する所をのりしをのりしをのりし  
 看客の心やそんよるものなりしをのりしをのりしをのりし  
 かくぬぞと塩やう翁のちぬぬのたぐひ初編り八戒  
 あままたちちりおのりしをのりしをのりしをのりし  
 画匠の詠へくちきわらむむりんあ人のとどち異あまをわ平  
 ころ人としてありし



松林姪女  
 無<sup>テ</sup>牙<sup>キ</sup>穿<sup>キ</sup>屋<sup>ヲ</sup>亦<sup>ラ</sup>嚼<sup>ラ</sup>苗<sup>ヲ</sup>  
 塞<sup>リ</sup>燭<sup>ヲ</sup>光<sup>リ</sup>消<sup>テ</sup>再<sup>ビ</sup>作<sup>レ</sup>妖<sup>ヲ</sup>  
 半<sup>ク</sup>截<sup>リ</sup>觀<sup>音</sup>功<sup>ノ</sup>德<sup>ノ</sup>少<sup>ナリ</sup>  
 一<sup>ニ</sup>條<sup>ノ</sup>靈<sup>ノ</sup>索<sup>ノ</sup>曳<sup>ク</sup>青<sup>ク</sup>霄<sup>ニ</sup>

五岳



陷<sup>ク</sup>空<sup>ク</sup>山<sup>ノ</sup>  
 無<sup>ク</sup>底<sup>ノ</sup>洞<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>死<sup>ニ</sup>女<sup>ト</sup>

新編言海卷之一

五二



寇負外



寇負外

名詮自性固難誣

寇氏寇來終害軀

寬解四衆功却テ有リ

再生恩澤送ニル師徒一

一老  
鳥  
圖

...

...





九靈元聖

酒是無明大毒池  
 破家亡國使人癡  
 人間天上異年紀  
 竹節山中三閱暮  
 岳亭島

會本西遊記四編卷之二

四

續本西遊記四編卷之二

四





辟塵大王



辟寒大王

辟暑大王

西遊記

卷之四



三大王  
 燮燮半渚萬一怪口王  
 從來憐再角一頭靈  
 一宵何事貪二燈一燭  
 光耀燐一歷二四一星

五岳



繪本西遊記四編卷之壹

岳亭丘山譚

池

姪女貞陽求配偶

心猿守主識妖邪

話表三藏師徒の只管西小進とる處小一時一川の里松  
 大林の中入る半日餘と行ども未と林と出る路を見  
 於三藏則ち馬を止めて曰く以林中僥倖小閑雅と我  
 女時馬を憩へし你寺齋を求めて来と行者領と承めんと  
 噫て旦師父を馬より下し松陰の下小座せし自ら鋒玉  
 を取て雲小打踏空中小飛行り八戒汝僧も馬を觀と  
 擔兒を下し林中を徘徊と其死爰遊ひ歩行たり三藏  
 の独樹下小在て多心経を念て居あひしが勿心ち聽彼知小  
 人の叫ぶ言と助めくと呼る更頻り三藏大に怪と斯





る深林の中に何人う在て斯様小叫びぬるや是管は虎狼  
の類小出遇する者うんと彼色を視的小尋行の人を果て  
一株の大樹の下小一個の美貌女子上羊身と葛藤を以  
て松樹小細縛下半身を土裡小埋め置るる三藏是を  
看て大小歎て曰く女菩薩何更有て斯細縛らむのや  
彼女子泪を流し谷て曰く我家の爰を去更二百餘里負  
婆国と云る處より此程清明の時節を我父母諸人と  
俱小野小出て遊に乍ち一殿の強偷現と来りし鎗刀を  
取て斬て廻る我父母と上首諸人我前小と逃去ぬ我幼き  
小依て狼狽て地小倒と遂小強盜小控らと此山中小扯  
来り他寺個々我を妻小せんと云て亦争ひを傲奪り因

て我を斯林中に捨置四散小別と去て往方を知り我爰小  
左更已小五日五夜より万望の老師父大慈悲を垂り我  
一命を救ひあり九泉の下に在ても更小大因心を忘る候は  
三藏是を聞て覺は泪を流し徒勞寺那知小在と呼ぬを  
八戒汝僧是を聞着急ぎ師父の許小跑来る三藏則ち  
八戒小命と彼女子が細縛を解放しんと為り如小行  
者空中小より是を看て急ぎ林中小飛で下早く八戒の耳  
を取て扯倒しるは八戒驚き罵詈言て曰く師父今我小命  
とて這女兒を救らるるを你怎麼我を引倒しや行者曰く  
師父此女子を解更さると他の是一個の妖精にて我れを  
幾ん為に来しるる三藏是を聞て悟た云言生乎小趣





三藏松林中



三藏松林中

女子助

7

71



悟は既小其如くろくバ我も亦是を不顧として畢に八戒を止  
 めてユエ去ぬを行者大の小惟喜急ぎ師父と扶く馬小  
 跨せ四個一肩に西を指て進とろ原未這女児行者ら  
 言小違は一個の妖精ろろろ牙を咬で行者と恨と此  
 幾年孫行者が神通を同傳ら果然と虚ろは彼唐僧  
 童身より修行一點の元陽を泄さ他を合掌て配合と做  
 大し金仙と成んと思に不期這猴孫に識破とる我再  
 び法を設て他を呼返さんと思ひ唐師父那ぞ人の一命を救  
 ひろど這様の薄情意を持と却て佛を拜せんと思へ  
 何ぞとやと風小隨ひて西二色呼とろ二藏遙小是を同  
 て馬と住め悟空你彼女子が云言を同他がら處大の小

理あり人の一命を救ふ更七級の浮屠を造るより勝るとや  
 我再び返て彼女児を救ふべと亦馬を轉廻ぬを行者  
 打笑ひ師父亦例の慈悲を登り我も亦師父を名  
 きの良菓や若強て是を住めを師父亦我を奴とめん  
 唯心小任せめとて個々原の處小立飯つ三藏八戒小命  
 て遂小彼女子が網傳を解とせ釘鉈を取て他が半身  
 と穿出せを彼女子大の小惟喜急ぎ上つて衣裳と整へ三  
 藏を礼拜とろ三藏の此女子を同伴て亦西小向ひて林  
 中を歩行出のゆる時悟空の口管小笑て止は三藏の曰  
 く這淫猴息生斯の若く笑や行者曰く師父今佳人  
 小逢る今宵の好景あらん三藏是を聞て怒て曰く你



乱説と云、変りゆくこと、以時天色漸々、晩に及び、松林の盡る、  
宛小一座の殿閣、現はるる小僧、二藏徒等、呼んで、  
「音は一座の寺院と見え、我旦那里小往て宿を要むべし、  
你们女甘口、薩を介抱して、静小来、と三藏一個、前小進、  
山門小立入、七時、彷徨居、時、寺中より、各、黒く、筋骨  
露、と出、道人走り、出、怪氣小三藏を顧居、  
「看て、暗小、怕、你の妖精小有、どや、我ハヨ、常の僧小、  
は、東土大唐より、爰小来、我手下小降、竜伏虎の徒、  
「あ、我を過ち、拿て却て、你、一命を亡、  
道人跪下て、曰く、老爺々、我の管は、妖精小、  
海禅林寺と号し、我の、則ち、寺中の、香華、道人、命々、  
遠方より来、且、這方へ、入せ、  
る時、亦、一個の、喇嘛僧、走、出、  
大の小、惟、喜、る、光景、  
背を、撫て、手、を、携て、方丈小、伴、ひ、  
親む、禮、  
了、  
由、を、述、  
と、東土より、西天小、至、る、に、幾、万里、の、山川、を、  
到、る、處、都て、  
藏の、曰く、我、元、来、三、個、の、徒、  
渡、の、我、を、守、護、て、爰、小、来、  
唯、今、俱、小、門、外、小、在、  
僧、個

遠方より来、且、這方へ、入せ、  
る時、亦、一個の、喇嘛僧、走、出、  
大の小、惟、喜、る、光景、  
背を、撫て、手、を、携て、方丈小、伴、ひ、  
親む、禮、  
了、  
由、を、述、  
と、東土より、西天小、至、る、に、幾、万里、の、山川、を、  
到、る、處、都て、  
藏の、曰く、我、元、来、三、個、の、徒、  
渡、の、我、を、守、護、て、爰、小、来、  
唯、今、俱、小、門、外、小、在、  
僧、個



念麼爰小到る更と得ん喇嘛僧大の驚き我以此所虎  
狼妖精多くと夜小入てい絶て人の往来を徒等們快く  
唐長老の高徒と呼まると云を兩個の小喇嘛兒急い  
門外小出たり乍ち驚き死し飯して曰唐長老の高徒の  
門外小居るは却て二個の妖精一足の白馬を牽亦一個の女  
子一遍小左思ふ小高徒の已小妖怪小吃せりあらん二藏打  
笑ひ其の二個の則ち我徒等より管へも妖怪小あは一個の  
女子の松林中めて一命を救ひ来し者多し他們都々怖  
るべし者には有は快く呼まるとい人とい曰へも小喇嘛漸々小  
と定め又門外小立出不及時三個の徒等と彼女子を導  
引て方丈に入来りたり

鎮海寺心猿知怪

黒松林三衆尋師

鎮海寺の衆僧小東土より聖僧の来し由と聞都て方  
丈小集りて来て二藏小相見へ急ぎ師徒小奇を進め彼  
女子を一遍小座せしめて相倍させり衆僧們一つ小二藏の説  
話と聞二つ小の彼女子を暗小窺ひ亦女子を救ひ来し  
變るごとと聞已小三更の頃小及びく彼女子の別小天王殿  
小臥しめ三藏師徒の其方丈小安寝せむ衆僧個々  
退れり明日に至りて徒等們已小馬を備へ行李を收拾  
師父の起るを待たむとも二藏只管沉睡と起出あつ  
を行者則ち師父の枕を揺り兩三色呼醒しりるとは三藏僅  
小頭を擡げ我何故といふ更を知り頭重く身中疼く一向





三藏姉女と  
僧引て鎮海  
禪林寺に宿る

繪本大西遊記口説





小一身動難と曰へ八戒急ぎ手を伸て師父の身上を  
 摸て曰く我能以病を知是是昨宵錢費ざる飯と見て餘  
 小幾碗食過して傷食をいひて行者曰く你慢小乱  
 説を吐変るると師父既小不快るる日るを小住して居て平  
 復を待て路小出るべしとて遂小此寺小滞留し不期も兩  
 二日を過しぬ一日二藏頭を撞て悟空を呼で曰く此兩日  
 我病小困苦て曾て回きり彼松林小て救ひ来りて女苦  
 薩小食を送る者有やと問ゆ人を行者曰く師父自己の病  
 を慎る人他が変を憂ひぬを變るると二藏曰く你少時我を  
 扶け起して紙筆を取出して我小與へよ行者曰く師父紙筆  
 を要て何ゆめや二藏泪を流して曰く我今斯る病を得て

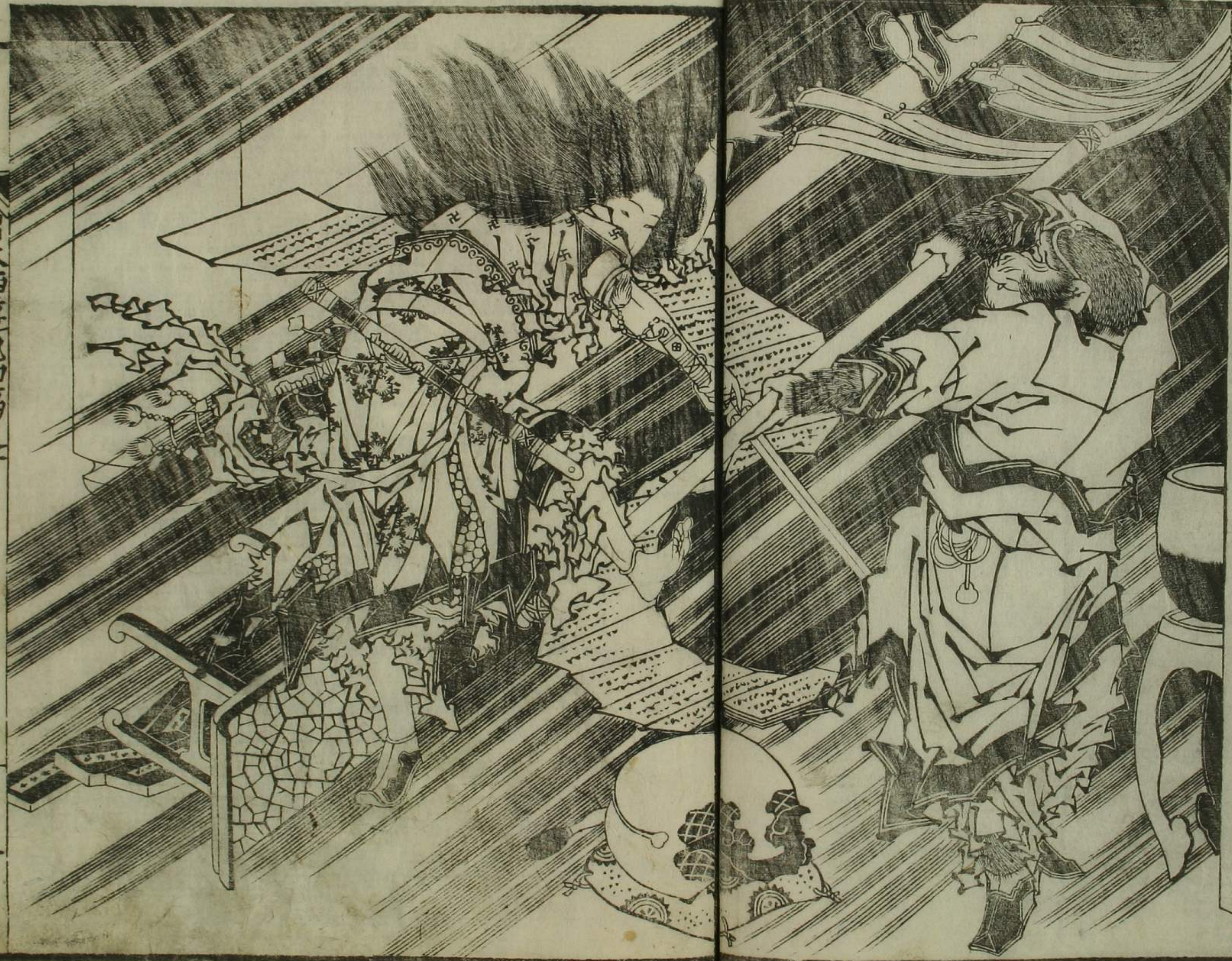
管はる小身を終るべし今一封の書を寫て此上旨を大唐  
 白王帝小奏し別小亦人を擇で西天小到らぬんと欲は你  
 我為小長安小登りて皇帝に我書を献るる行者是  
 と聞て大り小笑ひて曰く師父今女の病あり勿心ち這樣  
 の匹弱き変を曰くや假令十分小疾重くとも若し孫真府  
 小打入十大焰王と拉住て未問せの誰か師父の命を要る  
 的有ん八戒曰く師兄斯の若く日へとも人の姓名命の計り  
 難く我寺日造葬の準備を為可らん行者曰く亂子  
 乱話と云変るると你原故を知は師父の如来今二個の  
 徒才金禪長老の轉世小て師父前世のとた如来の會下  
 小在て座睡して左の口小て一粒の米を踏めり此罪小因



て今こん生せいふて二日の病やまひ疾ぢあり今日こん過を官かみに快くわい氣きゝゝらん  
三藏さんざう曰いく誠まこと小我病わがやまひ昨日きのう小比ひをむむむ同どうららは今日こん日ぢを口くち  
裡うち渴かつきを生う涼水すずみづを得えんん更さらを思おもふ行者ぎやうじや曰いく師し父ふ水みづ  
を思おもひぬぬ病やまひ已ま除のぞさるるる我われ快くわいく水みづを取とり進すすせん  
と鉢えつ盂ぶを取とり寺てら中ちゆうの香かう積じき厨ちゆう入いるる爰こゝ小衆僧しゆうじゆう都とて  
一いつ匹びつ知ち小在あ個こ々々泪なみだを流ながして居ゐるる小こぞ行者ぎやうじや怪あやして曰いく  
你なんぢ小何なんと歎なげくや我われ輩たいが幾いく日ひ爰こゝ小滯留とど留り新あらた米こめを費つひは  
を憂うれふふ小こあらばば衆僧しゆうじゆう曰いく更さら小這こ様やうの更さら小有あらな里り  
よりり妖怪ようかい来きりて前夜ぜんや二個にこの小和尚せうじやうを取とり只ただ衣服いふくとと嚴げん  
骨こつ後ご園えんに有あり次つぎの夜よ亦また二個にこの和尚せうじやうを取とり吃くと昨宵さくや又また二  
個にこを失うひる此こ三日さんじつ已ま六個ろくにこの和尚せうじやうと失うひる你なんぢの師し父ふ今

病やまひ有あり小因より敢あて是こゝを告つげ我われ們ら此こ故ゆゑ小口くち管くわん心しんを痛いため  
歎なげくく候まうふる行者ぎやうじや是こゝを問とて曰いく是こゝは妖怪ようかいの死し為なり小  
疑うひまく我原われはら妖ようを降くだり怪あやしきを取とり術まじありる你なんぢ寺てらが為なり小今  
宵よ彼か妖怪ようかいと控とぐぐ管くわんに故心こころ更さらるる衆僧しゆうじゆう此こ言ことを問と  
て思おもへる他た已ま小唐僧たうじゆうを守まもり護ごり幾いく万まん里りをへて爰こゝ未ま  
る極ごくて降くだりる竜りゆう伏ふく虎この手て列れつありると思おもひる長老ちやうらう此こ地ち方はうの為なり小  
妖怪ようかいを除のぞきぬるを我輩われらが為なり再また生せいの俸ほう饒にほふふと云いふ  
彼喇嘛僧らまじゆうが曰いく你なんぢ寺てら日ひ其その言ことを住すまり今こん唐師たうし父ふ病やまひあ  
り長老ちやうらう若わか妖精ようせいと戦いくさひありる或ある唐師たうし父ふの憂うれひを成なり行  
者ぎやうじや曰いく院主いんしゆうの言こと理ことあり日ひ師父しふ小告つげて商議しやうぎをなすと  
頓とんて水みづを取とり方丈はうぢやう小行師ぎやうし父ふ贈くわふふ與あらら二藏にざう只ただ一いつ飲いん小





禪室に悟空  
大小姫女と戦ふ

大小姫女と戦ふ



吃終つし忽ち神氣暢達し亦両碗の糲を進め病勢頓ふ七分を減らり行者是を看て大り小惟喜夜ふ入る師父の病いよく快氣小見々も則ち此寺中小妖怪あつて我々爰小滞留事既小三日其間小六個の小和尚を捉ととり我今宵他輩が為小妖精を捉んと思ひ候ふると告ぐとを二藏大り小驚き妖精已小寺内の僧を吃ひ殺し我々も亦僧より鬼死せぬ狐歎むの道理多う你能心を用ひて妖精を拿へ来せと曰へる行者惟喜唯一個佛殿小至り十四五歳の小和尚と覺れ木魚を搗き経を念へ妖精が来ると待居り已小三更の頃小至り残月僅小影る頃忽ち一陣の風颯と卷つし甘藷麝の香つし鼻を穿ち一個の義

貌女子忽然と現れ佛殿小上り行者が手を取て曰く小長老何の経を念うや少時後園小来り我と云ふが妖観して果を成めんと行者が手を捉去んとは是を見て行者心中小想ふやう儲ハ幾個の悪僧们色欲小欺しとく姓名を失ひつると言えり我今他を道さんやし急小彼女子が手を捉住め本相を現し鉄棒を把り打んとは妖精大り小驚き身退れ両口の剣を抜出し佛殿の前小在りて兩個是時戦ひつるが妖精忽ち身を轉じて左の脚の鞋を脱脱語を念ふ本身の摸搦と覺れさき両口の剣を便りて行者と戦へせ置真方の身の一陣の清風と化し方丈小飛入二藏を捉將て何地とも



那去けり行者の是れ心着ば只管彼女子と相戦ひ  
 逐ふ女精を打倒し亦一棒に打んと為時却て是一隻  
 の鞋と言ふるふど行者是を見て首て首見つと借の他が  
 計策に陥入る口惜さよと急ぎ方丈小飯つと入る看ば  
 師父の既小居るは八戒と汝僧と二個忙々然るど  
 居るるる行者曰く師父の何処へ去めいぞ八戒汝僧答  
 て曰く今一陣の風至ると思ひに忽然師父の見ぬれば  
 是官は妖怪の爲に控せぬいさるん行者是を聞くと大  
 の小留し你寺守護と在る何ぞ空然と妖怪小  
 師父と奪しつるや且你们を打殺さんと鉄棒を出しけ  
 らし八戒慌得て馬を頭を抱へる身を縮め動き得ば汝

僧の却て捲簾大将の臨凡ふる変小馴る者ら此二  
 騷む行者が前小跪下師兄少時待て今我二個を打殺  
 さんとつる再び師父を救へば花果山小飯つと去んと田心ひみ  
 みるん行者罵て曰く我那ぞ水簾洞小飯んや唐僧と  
 守護と西天小至るる汝僧曰く師兄恨らるる若我  
 西個急んを誰か能馬を牽誰か荷を擔ひ誰か又食を造り  
 薪菜を捨さんや師兄且留を止し我れを免し明朝三箇  
 同く力を合せて師父を尋む亦却て益有ん行者是を聞  
 て理ありと怒を収め心を飯然を明日你们と同く力を合  
 師父を尋て救ふと云るふど八戒大の惟惶此般の言の  
 都て我身に懸つる言なり唯我れ小任せ置ぬ人となり其方





西谷湖西度遊



西谷湖西度遊  
今紫嘉子全収  
安住山室園画

悟空怒て八我  
法師を殺んとす

西谷湖西度遊



夜よの三さん個ごとも小こ方かた丈だけ小こ夜よを明あく翌あした日ひ個ご々々急いそぎ起お出で山やまと  
衆しゆ僧そうを呼よびて昨きのう宵やの更こを語かたり又また前まへ日ひ携たづ来きつて女子おんなを尋たづね  
る小こ巳み小こ去さ方かたを知しるを借かりて這こ女子おんな妖まじ怪まじ小こ師し父ふを奪う  
ひ去さる小こ疑うひ事ことと云いはれしを衆しゆ僧そう亦また大おほ小こ驚おどろさ我われ手て却かへて  
老らう師し父ふの煩わづ勞らうを憐あはれりて日ひ三さん個ご小こ奇きと侑たづめ々々行ぎやう者しや々  
輩はい二に個ごの遠とほ小こ馬まを牽ひ控かを荷かひ以もつ妖まじ精せい前まへ日ひ彼かの女子おんなの  
居ゐる松まつ林りん中ちゆう小こ往むかひて尋たづねを速すみ小こ知しる事こと亦また東あづ小こ向むかひ  
轉ひ廻くわり彼かの松まつ林りん中ちゆう小こ至いたりて行ぎやう者しや則すなはち咒まじ語ごを念ねんて以もつ地ち方かた  
の土とち地ぢ神じんを呼よび出でる以もつ地ち小こ妖まじ精せい在ありて尋たづねを土とち地ぢ神じん答こた  
てり小こ曾そて妖まじ精せい々々然しかども此この正ただ南なん千せん里り計かりて陷お空くう山さん無む底てい洞どう  
と云いふ處ところあり這こ洞どう中ちゆう小こ一いつ個ごの妖まじ精せい住すまりて他た昨きのう宵や一いつ陣じんの陰いん風ふう

と做なりて以もつ地ち方かたを過する極きまて他た洞どう中ちゆう小こ廻くわりて行ぎやう者しや是こゝ  
を問とひて日ひ土とち地ぢ神じんを故ゆゑに去さる八はち戒かい沙さ僧そうと諸しよ俱く小こ白はく馬まを  
牽ひて一いつ斎さい小こ雲うん小こ打うち跨か少せう時じの間ま小こ南なん方かた千せん里り飛と行ぎやう至いたり  
一いつ座ざの大おほ山さん頭とう小こ住すまりて日ひ八はち戒かい小こ分ぶん付つて洞どう府ふの有ある地ち方かたを尋たづね  
ね々々と



繪本西遊記四編卷之壹





